

～愛の歌～

メンデルスゾーン：無言歌 op. 38-6

シューマン：献呈 (リスト 編曲)

アルカン：《歌曲集 op. 38 第1巻》より 第6番「舟歌」／第1番

《歌曲集 op. 38 第2巻》より 第2番「ファ」

《全ての長調による12の練習曲集 op. 35》より
第10番「愛の歌-死の歌」

リスト：ナポリのカンツォーネ S. 248

愛の夢 第3番 S. 541-3

— 休憩 —

ティネル：歌 op. 7-2

ベルヘ：ピエ＝ララ ※17世紀フランダースの大衆歌による幻想曲

アルベニス：愛の歌 op. 101-3

チャイコフスキー：哀歌 op. 72-14

ショパン：スケルツォ 第1番 op. 20 ※ポーランドのクリスマスキャロル

ピアノ協奏曲 第1番 op. 11 第2楽章 (バラキレフ 編曲)

文：川口 成彦

「愛」というものはあらゆる芸術においていつの時代も題材となってきました。恋愛感情としての愛、友愛、家族愛、自己愛はもちろんのこと、幅広い意味での人間愛も含め、「愛」は人間という存在の大きなキーです。

辻仁成の小説「サヨナライツカ」の登場人物である光子が書いた詩の最終部に「人間は死ぬとき・愛されたことを思い出すひとと・愛したことを思い出すひととにわかれる・私はきっと愛したことを思い出す」という言葉があり、個人的に人生の大きなテーマを凝縮したような一節だと思っています。

音楽でも「愛」が題材にあるようなものは沢山あり、今日の演奏会ではピアノという楽器を通じて、声楽家の方が愛を言葉と共に紡いで下さるように、ピアノで愛を歌ってみたいと思いました。

今回「声楽家のように愛を歌ってみたい」という気持ちから自然と「歌」というものも演奏会の大切な要素になっています。「愛」とは直接関係のない「歌」をテーマにした作品も演奏しますので、そちらも一緒にお楽しみ頂けたら幸いです。また以下の解説も含め、作品ごとの愛の捉え方は私自身の主観や妄想によるものです。

メンデルスゾーン [姉弟愛]

メンデルスゾーン(1809-1847)は歌曲を模倣した器楽作品「無言歌」の創始者と考えられていますが、実はそれを提唱したのは彼の姉ファニーだったとも言われています。彼女は当時のドイツの男女格差ゆえに表立った活躍を弟のように出来なかった隠れた天才作曲家で、メンデルスゾーンは姉を心から慕っていたようです。姉の突然の死のショックでメンデルスゾーンも後を追うように亡くなることは彼の人生を語る上で忘れてはなりません。彼の代表作「無言歌集」は3曲の「ヴェネツィアの Gondola の歌」を除いて、副題が付いていませんが作品38-6は「デュエット」という愛称でも知られ、メンデルスゾーンとファニーの二人が仲良く歌っているようにも感じます。

シューマン [恋愛]

シューマン(1810-1856)は名教師フリードリヒ・ヴィークにピアノを師事し、その娘で19世紀最大の女流ピアニストとなるクララ・ヴィークと恋に落ちました。しかしフリードリヒの反対から結婚に漕ぎ着けるまでは裁判が起こるほどの次の道で、その時期にはクララへの愛の結実をピアノ音楽に託すかのようにシューマンのピアノ作品の代表作のほとんどが書かれます。そして1840年によりやく二人は結婚することとなり、結婚式前夜にシューマンからクララに《ミルテの花 op.25》という歌曲集がプレゼントされました。その第1曲が「献呈」で「君こそは我が魂、我が心」と歌い始められる情熱的なラブソングです。リスト(1811-1886)がこの作品をピアノ独奏のために編曲したのも広く親しまれています。

アルカン [儂き愛]

アルカン(1813-1888)はショパン(1810-1849)の親友の一人で、ショパンの死後彼の弟子たちを引き継いだほどにショパンから信頼されていた音楽家でもあります。

“超”超絶技巧の作風でも広く知られていますが、彼の奇抜で個性的な世界観を伴った音楽性も彼の大きな魅力です。《全ての長調による12の練習曲 op.35》では美しくも切ない「愛の歌」に不気味で肌寒い「死の歌」が続く構成ゆえに、曲が終わった後の独特な余韻の中愛の儂さのようなものも感じられます。愛は儂いゆえに美しく、尊いのだと気づかせてくれる作品です。

また「歌」を意識してアルカンの「歌曲集」というピアノ作品群の中からも3曲演奏します。メロディーも美しいのですが、作品に投影されているようなアルカンの心の陰翳にも惹き付けられます。

リスト [人間愛]

音楽史上最大のピアニストの一人であるリストは、熱狂的な女性ファンが彼の演奏会で本当に失神を起こしたと言われるほどにあらゆる女性たちを虜にしました。モテモテのリストは多くの愛人を持つことにもなりましたが、その人生を懺悔するかのように、彼は晩年子供の頃から憧れたカトリックの聖職者になります。不倫という罪とも向き合った彼は、それを償うかのように様々な慈善活動も行い、自分自身が得た多くの富を人のために使うことを惜しみなく行いました。

リストという人間に伺える人間愛を象徴するような作品が「愛の夢 第3番」で、原曲は歌曲「おおせせ、愛せうる限り」です。この作品の歌詞には「舌には気をつけろ。悪口があなたの元から愛する人を離してしまうのだから」というような教訓の言葉も伺うことが出来ます。有名なこの作品の前には彼の哀愁漂う1842年に書かれた「ナポリのカントオーネ」も演奏します。

フランダースの作曲家 [音楽への愛]

私は近年ご縁があってベルギー北部のフランダース地方の作曲家の知られざる作品にも取り組んでいるのですが、「愛」がテーマになっているわけではないですが、「歌」にまつわる二人の作曲家の作品を演奏します。一つ目はティネル(1854-1912)の『2つの小品 op.7』の第2番「歌」です。彼はブラームスの時代のベルギーの音楽界に作曲家および教育者として大きな貢献をした人物で、この哀愁漂う「歌」は彼のピアノ作品の中でも旋律が美しいものの一つです。

二人目はファンデン・ベルヘ(1822-1885)で、彼は音楽の専門教育を受けずにアマチュア(音楽愛好者)として作曲を行っていた人ですが、《ピエ＝ララ》は傑作と呼ぶに等しい作品だと思います。ピエ＝ララはフランダースの民話中の人物で、いたずら好きな腕白野郎で、今回主題になっている歌は、死んだふりをして墓場に埋められたけれど、生き返ったという彼のエピソードが題材になっています。とても悲しい旋律ですが、ピエ＝ララの悪ふざけと思って聞くとなんだかクスツとしていまいます。

アルベニス [友愛]

スペインの作曲家アルベニス(1860-1909)は友達思いの情の深い人間でした。それを承知するのがショーソンのヴァイオリン曲《詩曲》にまつわるエピソードです。それは一度ドイツの出版社にアルベニスがこの作品を売り込んだところ断られてしまい、本人を落ち込ませないようにこっそり自費で出版し、ショーソンが44歳で亡くなるまでその事実を隠して「印税」という名目でアルベニスがお金を彼に渡していたという話です。アルベニスは晩年の《イベリア》に到達する以前は「愛の歌」が第3曲目にある曲集《夢 op.101》のようなサロン調の作品も多く書いていました。

チャイコフスキー [密やかな愛]

チャイコフスキー(1840-1893)は同性愛者でしたが、当時の帝政ロシアではそれは極刑に処されてしまう厳しい社会でした。彼は求愛してきた女性と結婚もしますが、結局結婚生活はうまく行きませんでしたし、交響曲第6番『悲愴』の直後の急死には同性愛に苦しんだ末の自殺という説もあります。帝政ロシアのマイノリティ差別の社会の中、彼も沢山の恋愛を密やかに重ねました。彼の晩年のピアノ曲集《18の小品 op.72》の中の「哀歌」は不自由ながらも美しい愛を求め続けたチャイコフスキーの心の破片が散りばめられたような作品です。

ショパン [自己愛、祖国への愛]

ショパンもあらゆる愛に溢れた人間だと思いますが、「自己愛」も彼の作品において特に重要な要素となりうると私は思っています。彼の作品の多くが彼の生々しいリアルな感情の吐露であり、作品に共感しようと思うほどに彼の心の中にある孤独感に触れてしまう気持ちになるからです。その孤独感を包み隠さず作品に内在させているところに、ショパンの自己愛を感じます。

20歳でポーランドを離れた直後に祖国では国を支配するロシアへの反発として11月蜂起が起き、ウィーンに滞在していたショパンは国外で悠々と音楽をやっていることへの葛藤や社会への憤りが心の中に溢れていたと思われます。その時期に書かれたと思われる《スケルツォ第1番》はそう言った彼の心境が爆発するような作品ですが、中間部にポーランドのクリスマスキャロル「眠れ、幼子イエスよ」が引用されることがこの作品をよりドラマチックにしています。母親の子守歌を思い出すかのような感情と共に、イエス・キリストの受難が中間部最後の不協和音で暗示されているようにも思われます。祖国の苦境をキリストの受難と重ねた可能性も考えられるでしょう。

ワルシャワ時代のショパンの最後の傑作は2曲のピアノ協奏曲ですが、それらの作曲時期はソプラノ歌手コンスタンツィア・グワトコフスカの初恋の頃であり、特に2番の第2楽章は「初恋の歌」とも言われることもあります。そして第1番のコンチェルトの第2楽章も同じように甘い恋心を吐露するかのような作品で、バラキレフ(1837-1910)がピアノ独奏用に編曲しています。

PROFILE

プロフィール



使用楽器:プレイエル 1843年製
協力:タカギクラヴィア株式会社

フォルテピアノ 川口 成彦

1989年に岩手県盛岡市で生まれ、横浜で育つ。

第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール第2位、ブルージュ国際古楽コンクール最高位。

フィレンツェ五月音楽祭、モンテヴェルディ音楽祭(クレモナ)、「ショパンと彼のヨーロッパ」(ワルシャワ)などに出演。協奏曲では18世紀オーケストラ、{oh!} Orkiestra Historycznaなどと共演し、今年には神奈川フィルハーモニー管弦楽団の弾き振りも行う。2018年にはロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団のメンバーと共に室内楽形式によるピアノ協奏曲のリサイタルをオランダにて開催。

東京藝術大学/アムステルダム音楽院の古楽科修士課程修了。

フォルテピアノを小倉貴久子、リチャード・エガーの各氏に師事。

第46回日本ショパン協会賞、第31回日本製鉄音楽賞 フレッシュアーティスト賞受賞。

CDは自主レーベルMUSISによる『ゴヤの生きたスペインより』(レコード芸術&朝日新聞特選盤)など。

Naruhiko Kawaguchi, Fortepiano

本公演は、終演時のカーテンコールに限り写真撮影が可能です。

※動画撮影や、録音、フラッシュの使用はご遠慮ください。

また、手を高く上げるなど周囲のお客様のご迷惑となるような行為はお控えください。



本日のアンコール曲は下記QRコードよりご確認ください！



“宗次(むねつぐ)ホール”と申します！

当ホールは、カレーハウス CoCo 壱番屋の創業者である宗次徳二がクラシック音楽を広めるために建設した310席のクラシック音楽専用ホールです。

オススメポイント盛りだくさん！

気軽に 思い立ったらいつでもどうぞ！
月間20公演以上1,000円より開催。

気軽に お出掛けにも楽。近くて便利。
栄駅から徒歩5分。立体駐車場(有料)も完備。

本格的 心地よい音響で生演奏を
録音音源とは別物。その瞬間にしか味わえない生演奏は格別。

本格的 演奏テクニックや息遣いが聞こえるほどの至近距離
310席の小ぶりなホールの為、全席がスペシャルシート。

身近に 大切な日に大切な人と。記念日に彩りをプラス。
お誕生日などの癒しのプレゼントに。お食事付きプランのご用意もございます。



宗次ホールチケットセンター TEL 052-265-1718 (10:00~16:00 不定休)

お互いに気持ちよく演奏を楽しむために

- ★携帯電話は音や振動が出ない設定に。
- ★拍手は、1曲全てが完全に終わるまでお待ち下さい。余韻を大切に。
- ★演奏中の物音にご配慮を。
 - ・プログラムやチラシをめくる音、膝から床に落とす音
 - ・飴やティッシュ、ハンカチを取り出す音
 - ・キーホルダーやストラップについた鈴の音
 - ・ビニール袋などのガサガサ音

鑑賞中に体調に異変を感じた場合は、演奏中でも遠慮なく最寄のドアからご退出ください。
お近くのお客様のご理解・ご協力をお願いいたします。

・館内各所にアルコール消毒液を設置しております。手指消毒にご利用ください。

Naruhiko Kawaguchi
Fortepiano Recital

川口 成彦

フォルテピアノ・リサイタル
～愛の歌～



©Shin Matsumoto

2023年11月26日(日) 14:00 開演
主催:宗次ホール

ブレイエル 1843年